今月の御教え

水が毒というが、水を毒と思うな。水は薬という気になれ。水を薬という気になれば、腹の病気はさせない。水あたりということも言うな。水がなくては一日も暮らせまい。稲の一穂も五合の水をもって締め固めるというではないか。水の恩を知れ。

……「天地は語る」第二十六条……

解説

この御教えは後に九州布教の開祖と讃えられる小倉教会初代教会長・桂　松平師が入信初めの青年期、念願の教祖広前へ初参拝を果たした時に教祖金光大神様から頂いたものであります。当初、師は多くの参拝者に気圧されて、広前の隅で小さくなっていましたが、金光大神様は御取次が一段落ついた時、師に向かい『周防のお方、遠方をよくお参りでした』と声をかけ、続いて『水は人が生きるために与えられた天地の御恵みであるから、有り難く頂けば腹の病気にはさせない』との、冒頭の御裁伝を下されました。さすがの剛毅な師も、教祖様が、初対面の自分の出身地のみならず、秘めていた持病の“かくの病(胃癌)”の事、そして水を飲むと病状が悪化するように思っていたことまで御存じの上、『水の恩』を諭された冒頭の御教えに無限の感動を覚え、身を震わせて平伏したとの事でした。正に、この御裁伝は『神のお蔭を受けるには、天地の御恵みを有り難く頂くことに尽きる…』ことを明らかに示されたお言葉であります。